



report 01

09 新潟水辺シンポジウム～信濃川のサケ復活と市民環境放流～

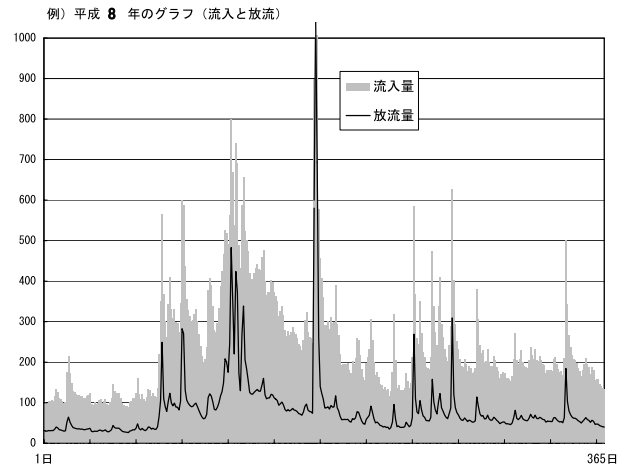
恒例の水辺シンポジウムが、12月5日(土)13:00から、新潟市の目抜き通り・榎谷小路にあるホテルダイヤモンド新潟で、三井物産環境基金の助成を受けて開催されました。今年も信濃川・千曲川のサケ復活と市民環境放流をテーマにしたところ、新潟市民のほかに、三条の五十嵐川を愛する会の方々や、JR 東日本、東京電力、三井物産、星組(福島県南会津で伊南川の復活に取り組む)などの会社関係の方々の参加があり、総勢100人を超えるシンポジウムになりました。



最初に、2008年度における信濃川・千曲川での鮭稚魚放流状況をビデオ上映し、次いで新潟の水辺賞の授与式では、通船川でカヌーの練習に励みながら川掃除を手助けしてくれたり、栗ノ木川さくら祭りの体験乗船で舟を漕いでくれている新潟市立万代高等学校端艇部に水辺賞をもらっていただきました。万代高校からは佐藤拓磨君・玉木優作君(当時3年生)と顧問の小黑智先生にご出席いただきました。

基調講演は「越後のたから サケを守る」と題して戸叶恒氏(独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所課長)が新潟県で捕れる鮭の種類や捕獲数、生態や回遊について分かりやすく解説していただきました。鮭が「越後の宝」であるということを実感しました。

調査報告は香野 哲大世話人が「宮中ダム変動



変動型維持流量一年間流量のうち約65%を発電に利用した場合(図・香野作成)

型維持流量放流」について報告し、山岸 俊男世話人が「西大滝ダム魚道ビデオ監視」について報告しました。変動型維持流量放流の考え方は、水辺だより77号に香野世話人から「大河信濃川と人のつきあい～河川環境と利水の調和に向けて～」と題して紹介されていますが、2010年4月3日のJR 東日本の宮中ダム水利権再申請において、5年間の試験放流のひとつとして実際に採用されることになりました。



2009年10月23日西大滝ダム魚道で捕獲されたサケ(水辺だより77号より)

西大滝ダム魚道ビデオ監視では魚道を上ってくる鮭の実際の映像が見られ、西大滝ダムまで合計20尾の鮭の遡上が確認できたことが報告されました。ただ、鮭の遡上のビデオチェックを行なってくれた梶瑤子副代表からは作業が相当に大変であっ

■水辺レポート

たことが報告されました。

パネルディスカッションでは「ついに千曲川にサケが遡上 今後の課題と展望」と題して、パネラーとして高橋 大輔 氏(長野大学環境ツーリズム学部 准教授)、伊東 芳治 氏(長野県高水漁業協同組合組合長)、根津 東六 氏(信濃川をよみがえらせる会副会長)、石月 升 氏(NPO 法人 新潟水辺の会 副代表)、コメンテーターとして戸叶 恒 氏(独立行政法人 水産総合研究センター)、コーディネーターとして大熊 孝 (NPO 法人 新潟水辺の会会長)が登壇、それぞれの立場から千曲川・信濃川との関わりと鮭の遡上状況について議論されました。



宮中ダムの水利権停止によって信濃川の流量がほぼ全量川に戻ったことによって、清津川におけるアユの漁獲が例年の3倍程度に増加し、宮中取水ダムの魚道でも、10月だけトラップが仕掛けられののですが、そこで160尾の鮭遡上が確認されるなど、河川環境が大幅に改善されたことが報告されました。

今後のあり方として、宮中ダム撤去という議論も出されましたが、水力発電は持続的なエネルギーとして重要であることから、宮中ダムの水利権再申請においては、現実に長野までそれ相当の回帰率で鮭が遡上することを目標に、河川環境と調和・共生する水力発電を模索し続けることが確認されました。そして、上記したように今回の水利権再申請では、試験的であるにせよ、現実に変動型維持流量が採用される運びとなったということです。

世話人 森本 利 & 会長 大熊 孝

「09年新潟水辺シンポジウム～信濃川のサケ復活と市民環境放流～」に参加して

2009年12月に新潟市で行われた「09年新潟水辺シンポジウム～信濃川のサケ復活と市民環境放流～」に、パネリストとして参加させて頂きました(写真-1)。



写真-1 今回のシンポジウムで発言している様子

信濃川-千曲川水系におけるサケの復活に関する問題について関わり始めたばかりの私にとって(写真-2)、今回のシンポジウムへの参加は、この問題を取り巻く現状と課題を知る上で、大変有益なものとなりました。

お声かけ頂いた新潟水辺の会の皆様に感謝致します。以下に、今回のシンポジウムに参加して感じたことや考えたことを、私が専門とする河川生態学の観点から記してみたいと思います。

サケは海と川を行き来する回遊魚の代表的なもの1つです。信濃川-千曲川には、サケだけでなくアユなどたくさんの回遊魚が生息しています。このような回遊魚は、川の生物が生活するために必要な栄養の一部を海から運んできます。

また、回遊魚を食べる陸生のほ乳類や鳥類によって、海から運ばれてきた物質は森にも運搬されます。

このように、回遊魚は森-川-海の生態系を結びつける大事な役割を担う存在です。

よって、川や森の自然環境の保全には、サケをはじめ回遊魚が自由に川と海を行き来できるような環境を整えることが大切です。

今回のシンポジウムでも話がありましたように、ダムの放水量や魚道の改善は急務であるといえま

す。ただ、これらの取組は最初からうまくいくわけではないことに留意が必要です。

なぜなら、様々な生物たちが織りなす生態系はとても複雑で、予測するのが困難であるからです。

この生態系という複雑系を管理する上で効果を発揮するのが「順応管理」という考え方です。最初に、既存のデータに基づいて自然環境を再生する計画を立案し、その計画に基づいて対策を実施します。

そして、その対策の効果をきちんと調べて、もし問題があるようであれば、計画を修正し、再び実施するというサイクルを繰り返していくことで、生態系の複雑さに対応することができます。

この順応管理には「対策がうまくいかないこと」が織り込まれているわけですので、短期的な費用対効果を求める人にはあまり好まれる考え方ではありません。

今後は、多くの人々が納得する形で順応管理を行うためにどのような配慮が必要なのかを考えることが、サケを復活させる上で大切になるかと思えます。



写真-2 昨年10月に長野大学生たちと行った西大滝ダムの魚道の夜間観察の様子

今回のシンポジウムでは、信濃川-千曲川水系におけるサケの復活には、水系でつながっている長野側との協働も不可欠であることを再認識しました。

ただ、私の住む上田市ではサケはすでに過去の存在であり、現在、サケに関心を持つ人は極めて少なくなっています。

このような状況では、サケの復活に積極的に取り組もうと考える人はなかなか出てこないでしょう。まずは長野の人たちに、「サケは目の前を流れる千曲川にも住む身近な魚である」というイメージを回復させる必要があると思います。

そのためには、今回のようなシンポジウムを上田市など新潟から離れた地域でも開催するなど、長野の人たちが日常の存在としてサケをイメージできるような取組も必要です。

また、シンポジウムでも少しコメントさせていただきましたが、長野の人は新潟から距離が遠くなるほどサケへの関心が薄れ、アユに強い関心を示すようになります。

冒頭でも述べたように、アユもサケと同じく回遊魚です。サケが遡上できない現状では当然アユの遡上も期待できず、現在、千曲川のアユの個体群は、他県からの種苗放流によって維持されています。

長野と新潟の協働のためには、サケだけではなく「回遊魚」の復活をめざすという視点が重要になると考えます。

高橋 大輔

長野大学環境ツーリズム学部 准教授

新潟水辺の会の学習会「水辺講座」のご案内

新潟水辺の会と新潟市西地区公民館の共催で学習会「水辺講座」を以下の日程で開催します。今の水辺環境や信濃川・千曲川を知る絶好の機会です。会員以外の方も参加自由（参加費なし）ですので、ふるってご参加下さい。

第1回 5月22日(土) 14:30～17:00

- ・大熊 孝「水利権とは何か？ その歴史と今後の維持流量のあり方」
- ・香野哲大「変動型維持流量について— JR 東日本・宮中ダムを事例に—」

第2回 6月26日(土) 14:30～17:00

- ・大熊 孝「ダムへの認識を改める」

第3回 9月25日(土) 14:30～17:00

- ・大熊 孝「鮭の回遊から学ぶ川の本質」

会場：新潟市西地区公民館(新潟市西区内野町603番地) 025-261-0031 JR 越後線「内野駅」下車徒歩8分

主催：NPO 法人新潟水辺の会

新潟市西地区公民館

問合せ：NPO 法人新潟水辺の会 025-264-3191

2010 鮭の稚魚市民環境放流 & 千曲川の環境シンポジウム

「さよならー」「また戻ってきてネ」小さなバケツを傾けながら、残雪たっぷりの千曲川、犀川に子ども達の声が響いた。4年前から始まった「水枯れの大河・信濃川に鮭の道を拓く」を目標に、新潟の鮭を長野まで遡上させる活動の一環として行っている長野での鮭の稚魚放流である。

3月20日早朝7時の新潟駅南口は、曇り空で寒い、寒い。肩をすぼめながら参加者が集まってきた。7時ぴったりに最後の石月副代表がバスに乗車して出発である。途中、高速道路で大熊代表はじめ、日本ボーイスカウト新潟連盟 黒埼第一団の児童が乗り込み、車内にがぜん活気がみなぎる。子ども達の元気な声は、ほほえましくもあり羨ましい限りである。

そんな子ども達を静かにさせるには、引率の戸枝さんからすぐに「あめ玉」が配られ、大人たちもご相伴にあずかることになった。間食をしない大熊代表も口にした。私は甘いもの辛いものなんでもOKである。



野沢温泉村にて千曲川放流

さて、新潟県境を越えて長野県野沢温泉村の東大滝集落下流の千曲川右岸にて、野沢温泉小学校児童20名、飯山市児童センターの子ども達25名、それに新潟のボーイスカウト6名が加わって、最初に千曲川への稚魚放流である。昨日まで

西大滝ダムは、ゲートを全開して全量放水を行っていたため例年に比べ千曲川の水量が多く、香野世話人にライフジャケットに浮き輪を持たせて下流に立たせ、参加者への安全確保をしておいた放流であった。



長野市の犀川にて放流

2回目は長野市内の犀川で松ヶ岡小学校の児童他20名との放流である。ここでは天候も回復して気温22.7℃熱くて汗ばんでくる。犀川の水温が7.5℃、稚魚運搬水槽13.5℃と温度差が大きいのが稚魚にとって心配である。本来なら温度調整して放流すべきであるが、ここではそれが難しく、バケツを川に浸して稚魚ができるだけゆっくりバケツから出て行くことを期待した。長野市の犀川と千曲市での放流稚魚は、中魚沼漁協で3ヶ月ほど飼育した稚魚を長野県高水漁協へ移して約3週間飼育、長野・千曲川の水の匂いを覚えさせて慣らすことにより、多く鮭が故郷へ帰ってもらう配慮である。

放流前に大熊代表から子ども達へ鮭の一生について話があり、バケツ放流のやり方について、「稚魚がびっくりしないよう、そっと川の中へ稚魚に余分なストレスを与えないで皆さんの思いを稚魚に話しかけて下さい」と説明された。放流後の親子の会話で、「どうしてお魚は泳いで行かないの?」「きっとお魚は亮君が気に入ったのよ」の話が聞こ

えたので、温度差ですぐには泳ぎ出せないことと、子どもには、「君の家では、どこでも動けるでしょう。よその家では、すぐには動き回れないでしょう」と解説し、他に鮭の生態について話していたら、他の親子も入っての話が続いた。

午後3時30分からは、長野バスターミナル会館にて、千曲川の環境シンポジウムが開催され60名の出席があった。パネリストは、平林 公男氏(信州大学環境科学課程教授・長野県内水面漁場管理委員)、茅野 實氏(長野県環境保全協会会長)、伊藤芳治氏(高水漁業協同組合長)、柳沢 京子氏(切り絵作家)、大熊 孝(新潟水辺の会代表)、コーディネータは石月 升(新潟水辺の会副代表)である。



シンポジウム会場

テーマの一つに、長野県内でいくら稚魚を放流しても、信濃川河口の新潟の漁師が全部先に採捕してしまうのではないのかに対して、採捕期間の区別があり、長野県が先に捕って、その後信濃川河口で捕ること、過去には長野県内、新潟県内ほぼ同数の漁獲量であったことを説明した。また下流の発電ダムのタービンに巻き込まれて全部死滅してしまうことに対して、実験結果では、約40%が生存していたことを説明した。

課題は、鮭が捕獲禁止魚種に指定されているため、長野県内に遡上した鮭は何人も採捕も食することもできないことである。法律上は採卵、ふ化、放流する人にも採捕が認められている。長野県

民が放流、捕獲、食せるようになることを目指したいものである。



宮中ダム直下流での信濃川放流

翌21日は千曲市にて、八幡小学校、埴生小学校、治田小学校他21名の子ども達と2万尾の放流をおこなった。このときは、千曲川の水温10.0℃、稚魚運搬水槽10.5℃とほぼ同温度であったことから、稚魚はバケツからすぐに泳ぎだしていた。

最後の放流は、十日町市宮中ダム直下流にて新潟水辺の会15万尾、JR東日本5万尾の共同放流をおこなう予定であった。しかし、天候が折り悪くみぞれ交じりとなって、川の水も濁っていたので、3万尾だけ放流して残りは後日となった。参加者は約150名で最も多かったが、天候には勝てず、震えながらの放流でした(残りの17万尾は3月24日に中魚沼漁協組合とJR東日本にお願いして放流してもらった)。

この度の稚魚放流、シンポジウムについて、長野県内の各マスコミが積極的に取り上げていただき県民へのPRになったこと、これを機会に県民の河川環境への認識が深まることを期待したい。そして昨年、長野県内で20数尾の鮭の遡上確認があったが、今年はまだ多くの鮭の遡上を願っている。

世話人 山岸 俊男

■水辺レポート

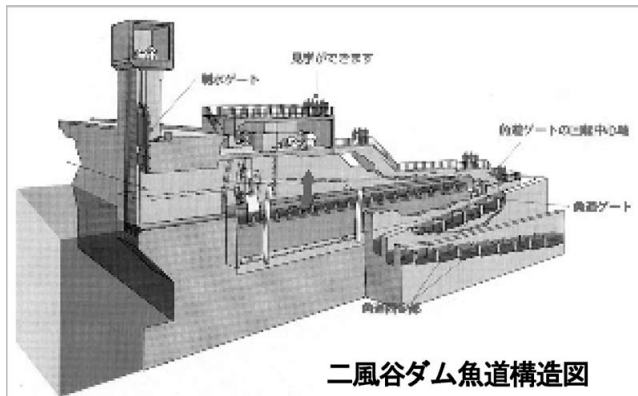
report 04

素人の魚道式ダム見学記-1

やっぱり魚は遡上するのに苦労するだろうねー

私は河川や土木とは縁ないが、昨年秋より北海道、その後の私事で四国や九州を訪ねた際、魚道のあるダムを数ヶ所見学してきたので、素人の見たダム見学を数回に分けて報告する。

昨年の11月に大熊先生たち4名と、北海道の二風谷ダム(特定多目的ダム)を見学した。この二風谷ダムは、アイヌ民族の聖地に作られる事で土地収用を取り消す様に裁判訴訟となり、違法と判決されたがダム本体の取り壊しまで行かなかった。又、1998年の運用からわずか10年で、当初予測の約100年分にも当たる堆砂があり、ダムの総貯水容量(3,150万m³)に占める堆砂量の割合が4割を超えた。今後、洪水調節の貯水容量に影響が出ている問題のダムである。このダムに設置された魚道は、ダム湖の水位変動に合わせてゲート(水路)が上下に移動する階段式であり、国直轄ダムでは始めて採用された魚道であったがそれ程の感動は無かった。



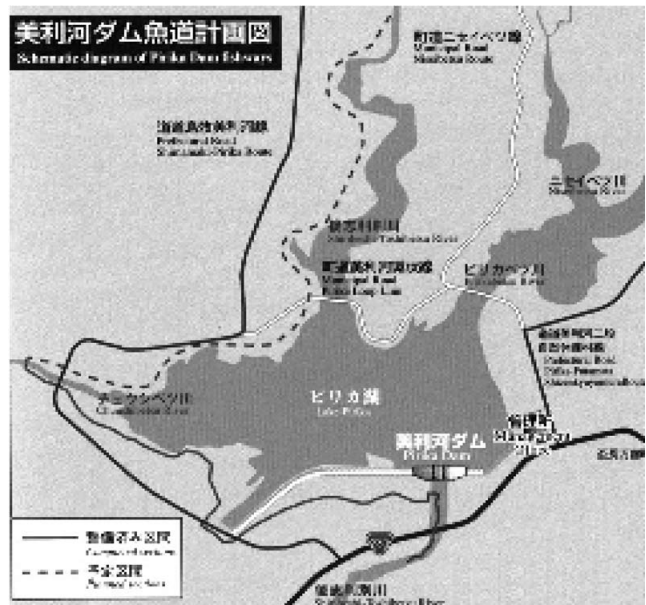
二風谷ダム魚道構造図

その後は先生たちと別れて、既設のダムに魚道を整備した様似ダム(洪水調節用)に行った。当日はどしゃ降りの雨で2門あるゲートは全開していた。あいにく雨風がひどく細部まで見学することは出来なかったが、途中で魚道の魚を見れるガラス製観察窓やキャンプ場を設け、魚道を曲線化したり壁面に絵を描くなど工夫が見て取れたが、遡上対象魚種であるサケ、サクラマス等の遡上はまだ少ない。

三日目は美利河ダム(特定多目的ダム)へ行った。美利河(ピリカ)はアイヌ語を語源とした「美しい川・良い川」の意味を持っている。このダムは堤頂長が極めて長いダム(1,480m)で、河川を横断して建設されたダムとしては日本



一の長さである。そしてここには日本一長い2.4kmの多自然型+階段式タイプ魚道がある。今後、延長約6kmの多自然型水路でバイパス方式の魚道を計画している。



このダムと魚道を見学するのに約2時間かかったが、魚にとって多自然型と言っても魚は遡上するのに苦労するだろう。5月より「水辺講座」が始まり、第2回に「ダムへの認識を改める」がある。皆様もお出掛けください、楽しみにしています。

事務局 加藤 功

これまでに見学した魚道のあるダム

	ダム名	ダム所在地	河川名	管理者	堤高	堤頂長	魚道長さ	魚道形式
①	二風谷ダム	北海道沙流郡平取町	沙流川	国土交通省	32.0	550	183	階段式魚道
②	様似ダム	北海道様似郡様似町	様似川	北海道土木局	44.0	140	288	階段式(一部管路式)
③	美利河ダム	北海道瀬棚郡今金町	後志利別川	北海道開発局	40.0	1,480	2,400	階段式+多自然型魚道
④	池田ダム	徳島県三好市池田町	吉野川	(独)水資源機構	24.0	247	165	階段式魚道
⑤	瀬戸石ダム	熊本県球磨郡球磨村	球磨川	電源開発(株)	26.5	139	430	トンネル魚道+階段式
⑥	荒瀬ダム	熊本県八代市荒瀬	球磨川	熊本県企業局	25.0	210	335	階段式魚道
⑦	白丸ダム	東京都西多摩郡奥多摩町	多摩川	東京都交通局	30.0	61	332	トンネル魚道+階段式
⑧	宮中ダム	新潟県十日町市宮中	信濃川	JR東日本	16.4	330	190	階段式魚道
⑨	西大滝ダム	長野県飯山市照岡	千曲川	東京電力(株)	14.2	115	189	階段式魚道

自然と共生することの意味 三井物産助成団体交流会に参加

われわれは「新潟の鮭を長野(上田・松本)まで遡上させる活動」と題して、2009年度から3年間、三井物産環境基金から助成を受けており、2009年度は鮭稚魚の発電タービン通過実験、シンポジウム、稚魚の放流などを行った。

三井物産環境基金は2005年に始まり、これまでに230件の団体が助成を受けている。そのうちの活動助成の助成団体の交流会が年1回行なわれており、今回は2010年1月28日(木)、29日(金)の二日間、東京・大手町の三井物産本社で行なわれた。参加団体数は95団体、参加者は140人とのことであり、新潟水辺の会としては初参加で、石月升副代表と金田英一世話人、それに大熊の3人が参加した。



写真1 全体会議ではいつもお世話になっている稲村規子さんが説明してくれた。

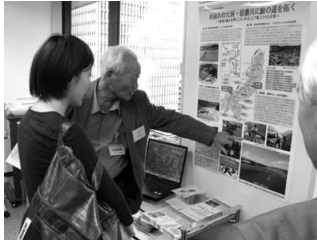


写真2 ポスターセッションで熱弁をふるう石月升副代表

初日は、全体会議と、今まで助成を受けてきた団体が4会場に分かれて前半・後半で合計8団体の成果発表を3人で分担して聞いた。全体会議では、われわれがいつもお世話になっている稲村規子さんが司会進行を務めておられた(写真1参照)。われわれはまだ初年度ということでポスターセッションに参加した。ポスターは加藤功事務局長が作ってくれたもので、それを写真2のように展示し、「新潟の水辺だより」や20周年記念誌、今までの活動をDVDにしたものを配布した。初日の夜は懇親会が行なわれたが、ポスターセッションの発表を見た人などから多くの質問があり、大いに交流できた。

2日目は、坂本文武氏(ファンドレックス社取締役)の「事業目標の設定・評価と効果広報活動」と、鶴尾雅隆氏(ファンドレックス代表取締役)の「ファンドレイジングと支援者拡大」の二つの講演があり、私は後者に参加した。ここでは、NPOの活動資金をどう調達するかが主題となり、われわれが水辺の会会員から運転資金として借り入れている「水辺協力金」について話題提供した。この「水辺協力金」は社会的には「擬似私募債」といわれるものようであるが、参加者から強い関心が示され、後日、メールで問合せが来たほどであった。

この交流会は全国のNPO団体の状況が把握できるので大変有意義であり、来年は、是非、成果発表に参加し、加藤事務局長に発表をしてもらいたいと考えている。

会長 大熊 孝

絵本「信濃川のめぐみ」の紹介

私は昨年12月末に「新潟水辺の会」の会員に教えていただいた佐藤哲郎と申します。

私が定年退職後に第一番にやりたかった絵本づくりが実現いたしましたので、ご案内をさせていただきます。

絵本の書名は、『～ふるさと自然ふれあい絵本～ 信濃川のめぐみ』です。



越後の母なる川、信濃川のめぐみについて、おとなが子どもに語って聞かせることを主眼に作成していますが、子どもの質問にも本質的な回答ができるような説明文を添えました。おとなが読んでも、信濃川の入門書として、おもしろい絵本になったと思っています。

絵は絵本作家として国際的な活躍をしている「羊画廊」(新潟市中央区古町8)の堀葉月さんをお願いし、文は私・佐藤哲郎が担当いたしました。絵本は絵が命ですが、やわらかなタッチで信濃川がのびやかに描かれていて、本当にすてきな絵本となりました。

光栄なことに、大熊孝先生からこの絵本の書評をいただいて、新潟日報に掲載(2月14日掲載)されるという幸運を得まして、おかげさまで販売数も伸びています。

4月10・11日には、朝日酒造株式会社(長岡市朝日)の「松籟閣」で、絵本の原画展と絵本販売をいたしました。

この絵本の定価は1,300円、購入できる店は「萬松堂」(新潟市中央区古町6)または「羊画廊」(住所は前掲)ですが、直接私・佐藤哲郎にご連絡いただければお届けいたします。(電話 0256-78-7575)皆様よろしくお願ひいたします。

会員 佐藤 哲郎

新潟水辺イベント情報 新潟水辺の会

●春の管名岳登山のご案内

日時 :5月15日(土)9時出発ー17時着

集合場所 :いずみの里登山口

問合せ先 :大熊メールアドレス bigbear1@ymail.plala.or.jp

●第2回 阿賀野川哲学塾のご案内

“無事なくらし”を営む中で水俣病に侵された人々が描かれている映画「阿賀に生きる」(佐藤真監督・1992年作品)を徹底的に鑑賞することから、先人の生き方を知り、新たな自然との共生の仕方を学び合いませんか。

プログラム

【1日目:6月19日(土)】

10:00～12:00 映画「阿賀に生きる」上映

(まだ、映画「阿賀に生きる」を見てない方は、まずここで映画を見てください。)

13:00～17:00 映画「阿賀に生きる」の徹底鑑賞

コメンテータ:旗野秀人(映画「阿賀に生きる」仕掛け人/本業大工)・大熊 孝(映画「阿賀に生きる」製作委員会

代表/新潟大学名誉教授・内山 節(哲学者)・鬼頭秀一(東京大学教授/環境倫理学・科学技術社会論)・関 礼子(立教大学教授/環境社会学・地域環境論)

※第1日目の18:00から夕食、その後、三人委員会哲学塾主催の徹底討論会を開催します。

【2日目:6月20日(日)】

9:00～9:20 紙芝居「阿賀のお地蔵さん」上演

9:20～12:00 21世紀の自然との共生のあり方徹底討論

主催:新潟県立環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—

◆定員50人先着順 ◆申込締切5月28日(金)

◆受講料 無料(夕食・宿泊は自己負担、宿泊は菱風荘)

◆会場・申し込み先 新潟県立環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—

〒950-3324 新潟市北区前新田字新々囲乙 364-7

TEL 025-387-1450 FAX 025-387-1451

メール: fureai@abeam.ocn.ne.jp

ホームページ: http://fureaikan.net/

編集後記: 会員相互の連絡手段としてパソコンメールやメーリンググループでの一括情報発信をしています。現在142名の会員がグループに登録しています。この誌面の編集作業でもメールを使っていますし、多くの人に素早く情報を流し、返事を頂けるので、とても便利な手段です。会の活動にも、これからの時代は必要不可欠と思います。

しかし、個人(会員)に振り返ってみますと中々、使いこなすのは難しい事も事実です。インターネットやメールの設定など興味がある私でも苦勞しています。IDやログイン、パスワードなど、言葉から理解しないと相手が何を言っているのか分からない人が多いのではないのでしょうか。エクセルやワードなどソフトの使い方を教える講座などは開催されていますが、その前の基本的な事を教えてくれる機会や人がいると有り難いのですが。会でも、そのような相談にのる仕組みや機会を作る必要があるかもしれません。 編集人: 森本 利

入 会 案 内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年:1987年10月15日 ■目的:水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者:大熊 孝(新潟大学名誉教授) ■会員数:個人182名・法人9団体(2010年4月1日現在) ■活動:信濃川・千曲川の大河復活活動/都市河川通船川・栗ノ木川再生活動/重文萬代橋を核とした水都新潟の創造/会報「新潟の水辺だより」発行/水辺シンポジウムの開催/長野県水辺グループとの交流会//水辺環境に関する調査・研究支援 etc. ■年会費:個人会員一口1,000円を2口以上、家族(2名以上)会員一口1,000円を3口以上、賛助会員(法人など)一口5,000円を2口以上

入会申込書

年 月

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 () -	
職業		
勤務先	〒 () -	

注)紙面の都合上、縮小しています。250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●発行: 特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264

新潟市西区みずぎ野 4-7-15 大熊 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

ホームページ

http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/

メール mizubenokai@plum.plala.or.jp

●会員数 個人会員212名、法人会員11団体 (2009年11月15日現在)